

## < 震災復興計画にあたってのランドスケープアーキテクトの役割 >

平成 23 年 4 月 20 日

都田 徹 (RLA)

経験のない大震災、被害者の方々へお見舞い申し上げます。

今回の不幸な大震災に対して、涌井さんから素晴らしい提案がメールで配信されました。震災から 1 ヶ月が過ぎ、日を追うごとにその影響のすさまじさや、人間を凌駕する自然の力に、われわれランドスケープアーキテクトが社会的に果たすことのできる役割を考えさせられる毎日で、涌井さんの文章を読んで、私たちランドスケープデザインに携わるものがいろいろとお手伝いできることがあるのではないかと感じました。

涌井さんが全般を通して語っているように、これまでの国土像の全国一律・平準的に底上げした国土計画の発想ではなく、地域に根ざした、人間の英知の集積である自然と応答関係の文化的蓄積によるアプローチを根気よく続ける『社会的生態ランドスケープ』の形成を行うことが復興計画への第一歩であるということに同感します。

また、その上に立って、一つはアメリカ大統領オバマさんの登場と同時に『グリーンニューディール』といったことへの言葉をさらに拡大解釈し、この言葉の延長上の理論構成として、次のような提案とプロセスがランドスケープ分野での私たちプロフェッショナルにとっては可能だと考えました。

筆者の経験として、アメリカでは各州が日本に比べしっかりと独立し自治を行っていること、その上でグリーンニューディールなどの大きなビジョンを国家が提案し、州単位でランドスケープアーキテクトのライセンス制度やその役目が確立されている現況を目の当たりにし、こういったアメリカのような社会のストラクチャを日本でも実践することによって、涌井氏が提案する国土計画論を効果的に達成することができるのではないかと感じました。そしてまたこれからの日本における東日本大震災からの復興を考える際、いまの日本でまず取り組まないといけないことは、長期的ビジョンの基に成り立つランドスケープアーキテクトの各地域での、そして国土全体としての役割であると感じます。

すなわち私たちにとっての『グリーンニューディール』とは次のように定義することができないかと考えました。

1. オバマ・アメリカ大統領が提唱する『グリーンニューディール』構想の発展型としての『日本版グリーンニューディール』を復興計画のモットーとして考えてゆけばどうでしょうか。
2. アメリカの『グリーンニューディール』はグリーン、すなわちクリアエネルギーである太陽光発電や風力発電など、自然の力によるクリーンエネルギーを用いて、環境に優しい地域開発・都市開発を経済の柱にすることが中心となっています。
3. 今回の震災復興では、このようなクリーンエネルギーを、単にエネルギーというインフラストラクチャーに留めることなく、地域コミュニティやライフスタイルを含めた“快適な環境”を創ることの具体的展開と同時に、今世紀における環境重視策の実践を提案します。すなわち、人と自然を重視したまちづくりを達成するための“環境都市デザイン”に対する新たなプロセスへの提案を行います。
4. そこには“グリーンインフラ”という概念を取り入れることが重要です。“グリーンインフラ”とは、電気、ガス、上下水道、道路、鉄道という従来のインフラストラクチャーに加えて、グリーン（緑）を都市のインフラストラクチャーと捉え、計画の初期段階から考慮しなくてはならないという考え方です。
5. 例えば、河川（運河）やクリーンエネルギーのインフラライン沿いに 50m から 100m の“緑地”を作り、この緑地のラインを“グリーンインフラ”として、これまでの機能本位のインフラストラクチャーではなく、グリーン（緑地）を含めた“グリーンインフラ”を構築してゆくことが大切だということです。点としての公園緑地を“道（ライン）”の緑地が、地域の本物の“グリーンインフラ”に醸造される経緯も含めたプロセスです。“グリーンインフラ”では都市のエネルギーを運び、物を運び、水を運び、そこで作られている緑地帯には緑道やサイクリング道などがあり、“風景の道”として、街の“グリーンネックレスインフラ”になることが肝心です。
6. ボストンでは、従来の河川や運河を利用して、公園を結んでゆく“エメラルドネックレス”計画をより強固にするため、高架の高速道路を地下に移して、その上を緑地にすることでグリーン（緑）を結びつける努力を行っています。そしてこの“緑のネックレス”が、地域住民の、日常生活の“心のアメニティネックレス”に心理的にもフィジカルにも今後は変身してゆくこととなります。したがって、この“グリーンインフラ”を復興計画の中で形成することが、21 世紀の理想の地域開発、復興計画につながるものと考えます。一般に言われている水と緑のネットワークや緑のコリドーと言った標語はさらに発展

させられるものであり、この“グリーンインフラ”という概念のもとに作成された新たなランドデザインは、都市構造全体を見据えた“Sustainable = 持続的かつ永続的”な環境都市デザインに結びつくと考えています。

7. 東日本大震災の復興計画では、『大きな構想計画とこのための復興プロセス』が必要です。日本の風土にあった“日本の風景の道”、これらを“日本のグリーンインフラ”として具体的に復興計画に取り入れ、創ってゆくことが大切だと考え、具体的プロセスと方法論に関して、次のような提案を行います。

プロセス :

- 1) まず、ランドスケープアーキテクトとしての役割を認識し、復興計画に何らかの具体的役割をはたす“決意”を各人が持つことが大切です。そのうえで現地での問題点に立ち向かいます。
- 2) ランドスケープだけの分野ではなく、都市計画、建築、土木やその他の社会科学の各フィールドとの協働のシステムを構築する。(フィールド間の連携システムチャートの作成)
- 3) まず現地に入り、具体的にダメージマップを分野別に作成する。(ダメージマップの作成)
- 4) ダメージマップにて、災害前と災害後によって地域の資産(リソース)がどう変化したかを認識する。(認識問題マップの作成)
- 5) 災害復旧プロセス・スケジュールを当局より入手・調整を行う。(当局側との連携)
- 6) 災害復旧から復興にいたる全体的なビジョンとランドプランを作成する。
- 7) ランドプランへの具体的なプロセス・プログラムを考案。
- 8) 各フィールドでこれらのプロセスやプログラムに対するディスカッションを行い、実行可能なスケジュールのもとに、技術的な課題を洗い出し、多様な視点からなるプランに修正する。(このとき、地元の声をどれだけ吸収し、その内容を反映するかが鍵だと思います。)
- 9) 各分野からのフィードバックのもとにランドスケープアーキテクチャとしての総合的マスタープランを作成する。(ランドスケープの復興ビジョン作成)
- 10) このマスタープランを実践するためにはどういった問題が生じるかなどを列挙し、計画案のフェーズ化を行い、大きな流れを整理する。
- 11) 次のステップ。(プロセスへ)

以上、今後の長い復興計画において中長期的に復興活動にどれだけ参加できるか、またはその活動を継続できるかが、より本質的な復興計画につながると確信しております。